

〔論文〕

明治後期から大正期のキリスト教主義保育と フレーベル批判

角野 雅彦*

— 目 次 —

はじめに

1. キリスト教主義保育とフレーベル
2. J・K・Uとフレーベル、および進歩主義教育の受容
3. 保育の理念と実践の乖離

おわりに

キーワード：キリスト教主義保育、フレーベル、進歩主義

はじめに

1876（明治9）年の東京女子師範学校附属幼稚園の開設以来、日本の幼稚園は公立主導型で始まった。一方、私立の幼稚園が急速に増加したのは、1899（明治32）年の「幼稚園保育及設備規定」の制定以後である。この規定以前は、東京女子師範学校附属幼稚園で定めた様式が、公立系幼稚園の事実上の基準となっていた。

しかしやがて、明治末期から大正初年代は私立幼稚園の発展期となり、日本の幼稚園は私立主導型に転換した。その私立幼稚園のなかでも大きな勢力となっていたのはキリスト教系幼稚園であった。とりわけハウの開始した頌栄保姆伝習所

* Masahiko KAKUNO 本学社会福祉学部准教授（保育原理、保育者論） 教育学博士

は、多くの人材を保育現場に供給し、指導的役割を果たした。ハウは、キリスト教系幼稚園、保育所、保育者養成期間の統一機関である「日本幼稚園連盟」(Japan Kindergarten Union)を提唱し、初代会長となった人物であり、その影響力は大きかった。ある意味では、今に至る日本キリスト教主義保育の源流を形づくったともいえる。そして当時、キリスト教主義保育の先駆者であった彼女が、自らの精神的背景として信奉したのがフレーベルの教育学であった。

当初、フレーベルの教育学はキリスト教主義保育を全般にわたって支配する、きわめて統一的な原理であった。保育の思想、内容、そして方法に至って、フレーベル教育はキリスト教主義の保育そのものといっても過言ではない時期が存在した。

ところがやがて、その絶対的なフレーベル主義に批判が加えられるようになった。既知のように、米国の進歩主義教育は、フレーベル主義を形式主義、神秘主義として批判し、とくに伝統的な恩物遊戯がその批判の矢面として立たされるようになった。たしかに、わが国の恩物遊戯は、教師主導による模倣の再現であったところに問題があった。子どもを学習の客体から主体へと解放するといった試み、すなわち恩物教授の改革は、すでに明治期から東京女子師範学校附属幼稚園でみられていたが、それは自己活動の尊重という立場に止まり、経験の組織化へと議論がつかないまま、その意味でも、進歩主義教育は、改革派にとって、理論的支柱となる新思想として歓迎されたのであった。

こうした思潮に対してわが国のキリスト教主義保育のリーダーたちは、しだいに二つの立場に分かれていった。ひとつは、あくまでもフレーベル主義を堅持するグループ、もうひとつは、進歩主義を積極的に受容していこうとするグループである。先のハウは、後者の立場をとったのであるが、結果的には、進歩主義の受容派が主流となった。

ランバス女学院のクックも進歩主義教育に共感を抱いていた人物であった。彼女は広島女学校時代から児童中心主義を標榜し、進歩主義の教育を保育に取り入りたいと考えていた。クックの進歩主義への態度もまた、当時のキリスト教主義保育関係者には大きな影響を与えたに違いない。とりわけ、渡米してコロンビア大学で進歩主義の教育動向に直接触れてM・Aの学位を受けるという、当時では希少な日本人であった高森フジを帰国させ、ランバスに招聘したことが、その後

の進歩主義の受容を決定的にしたといえるだろう。

こうしてフレーベル主義は大幅に再検討を迫られることになったのだが、本稿でみていくように、じつは保育の根底にある子ども観や理念、そして精神という部分でフレーベル主義は継承され、絶えることはなかったのである。先のハウやクックにしても、実践は柔軟に進歩主義を取り入れるが、フレーベル主義は精神的に継承するという折衷主義をもって対応したのであって、進歩主義がキリスト教主義保育の精神を支配するには至らなかったのである。

なお先行研究としては、キリスト教主義幼稚園の創設から現代までの発展をめぐるキリスト教保育連盟百年史編纂委員会編著『日本キリスト教保育百年史』（キリスト教保育連盟、1986年）などがある。キリスト教主義の保育だけでなく、広くわが国の幼稚園の史的研究を試みた文献としては、倉橋惣三・新庄よし子著『日本幼稚園史』（初版：臨川書店、1930年）文部省編『幼稚園教育百年史』（ひかりのくに、1979年）などがある。大正期の保育概況については、日本保育学会編『日本幼児保育史』第三卷（フレーベル館、1969年）が詳しい。人物研究としては、小林恵子著『日本の幼児教育につくした宣教師』（キリスト新聞社、2003年）、西垣光代著『A. L. ハウの生涯』（神戸新聞総合出版センター、2007年）などがある。

これら通史的研究では、フレーベル批判と進歩主義の受容が淡々と述べられているが、本稿では、こうした新しい教育思潮とフレーベル批判に対して、元来、伝統的なフレーベル主義者であった当時のキリスト教主義保育の関係者たちが、精神的支柱としてフレーベル、実践には進歩主義を取り入れるという、ある意味、非常に困難な選択をせざるをえなかったその過程に視座をおいて考察してみたい。

1. キリスト教主義保育とフレーベル

(1) 明治期のキリスト教主義保育の概況－フレーベルに傾倒した婦人宣教師たち－
日本のキリスト教主義保育は海外、とりわけ米国の女性宣教師たちによってもたらされたところが大きい。1890年代、日本全国で幼稚園の設置が急速に進んだのであるが、とりわけキリスト教主義の幼稚園は順調に発展し、地方都市にも普及していった。1899(明治32)年の文部省官報によれば、幼稚園の数は官立1、公

立172、私立56、計229カ所に及んだ。そして私立56のうち、キリスト教主義幼稚園は33と半数以上を占めていた。

これらのキリスト教主義幼稚園は大まかに分けると①女学校を母体とするもの（長崎の活水女学校附属、函館の遺愛女学校附属など）、②教会による宣教を目的としたもの（金沢の英和、和歌山の田辺など）、③信者による個人設立（東京の駒込、榎坂など）、④貧困家庭の子どもの福祉と教育のためのもの（神戸の善隣、東京の三崎町など）、⑤婦人宣教師による保姆養成所に設立されたもの（神戸の頌栄、名古屋の柳城）、⑥その他（当初、外国人幼児のための幼稚園であった東京の彰栄など）などに分類することができる。

この中でも⑤の婦人宣教師が設立した保姆養成所に設けられた幼稚園が行った保育は、後継者養成を目的とした点で、その後のわが国の幼児教育・保育全体に継続的な影響を及ぼした。とりわけハウ（Annie Lion Howe, 1852～1943）の功績は大きい。彼女は優れた保姆の養成を何よりも急務と感じ、1889(明治22)年10月22日、幼稚園の開園(同年11月4日に開園)に先立って、2年制の頌栄保姆伝習所を開設した。この養成所の規則やカリキュラムはキリスト教主義を建学理念とする保姆養成校の模範となっている。やがて頌栄保姆伝習所卒業生たちも、全国各地にキリスト教主義幼稚園を創設し、先駆的な活躍をした。

ハウは、キリスト教主義の幼児教育を長期的視点に立って日本に根付かせることに力を注いだ人物であり、フレーベル教育の信奉者であった。ハウは頌栄保姆伝習所で、教育用に約100冊の幼児教育文献を米国より購入しているが、その中でもフレーベル教育の真髄ともいえる2冊の書物『人間の教育』と『母の歌と愛撫の歌』をとくに重視した。ハウは、キリスト教保育のあり方を示すとともにフレーベルの教育思想を紹介し導入するという大きな役割を果たしたのである。

そのハウをはじめとする婦人宣教師たちは、いずれもキリスト教信仰との深い関わりを持っていた。彼女たちにみられる著しい共通点は、いずれも彼女たちがキリスト教信仰の家庭に育っていることである。しかし彼女たちの家庭のキリスト教理解は保守的、あるいは根本主義的なものではなく、自由主義神学に位置するものがほとんどであった。

彼女たちは、子どもの生命に等しく内在する神性に注目し、内在的成長を自発的に遂げることに教育の真髄をみたフレーベル主義に傾倒した。自由主義神学は、

神を超越者とするよりも、人間に内在する存在と考え、人間の罪と悔い改めに變えて、「神の国」の達成に向けての成長、発展を重視し、社会の発展を求めるといふ著しい傾向をもつ。人間を罪なる存在として考え、子どもの回心や悔い改めを求める伝統的なピューリタンの理解とは異なり、人間の内に存在し、人間を生かし支配する統一者たる神を知ることをもって教育の目的とするフレーベルの思想への接近は、彼女たちにとって極めて自然なものであった。

オーベルヴァイスバッハの牧師の息子として生まれたフレーベルの教育思想は明らかにキリスト教を土台とするものである。しかし彼のキリスト教信仰は正統教会のそれと異なり、原罪を否定し、人間の本質を神的なものとして捉え、上からの権威主義的な教義の教えこみを否定した点に特徴がある。彼の教育は、自由な国家の自由な国民を、児童中心的な教育によって育成しようとする意図を持っており、身分的、職業的教育の枠を超えて全国民の子女の全面的発達を目指す人間としての全体的な形成を実現しようとする遠大なものであった。

保育には、子どもへのひとりひとりに対して深い愛情をもって理解する態度が必要である。婦人宣教師たちは、そのためには幼稚園の基礎となる哲学への理解を不可欠と考えていた。すなわち、フレーベル理論に対する理解を深めることが自らの保育者としての資質を高めるものと考えられ、同時にフレーベル思想の根底であるキリスト教信仰への理解をも意味した。

草創期のキリスト教主義保育においては、保育者は母親の良き相談相手となり、できるならば母親にキリスト教信仰を伝える働きが期待されていた。そこでは、保育者の醸し出す宗教的雰囲気重視され、子どもに対してもその担い手となることが望まれたのである。

また、そればかりか婦人宣教師たちは、キリスト教信仰に基づく保育を実践することによって、日本社会の文化形成、意識形成に貢献しようともしていた。この点についてはフレーベルも同様で、実際彼は幼稚園を単に教育機関として考えておらず、幼稚園を出発点として家庭、さらには社会、国家そして世界にまで影響を与えようとする、理想主義的な、ある意味では文化形成的な思想を内包していたのである。したがって、日本に幼稚園を伝播し、精力的にその指導に当たった婦人宣教師たちが、そのようなフレーベルの理想を達成しようとしていたとしても何ら不思議はない。

(2) フレーベル教育がめざすもの

それでは婦人宣教師たちが傾倒したフレーベルの教育学が目指したものは、いったい何だったのであろうか。フレーベル教育の究極的到達点は、神と自然、および人間との全き統一としての連関である「生の合一」(Lebenseinigung)を果たすところにあるといわれる。しかし「生の合一」という概念は、じつはフレーベルの独案ではない。その概念は、紀元3世紀頃の哲学者アンモニウス・サッカス(Ammonius Saccas)とその弟子であるプロティノス(Plotinos, 205～270)が提唱した新プラトン主義に遡ることができる。周知のように、古代ギリシャの哲学者プラトンは、我々の属する物質世界、現象世界の上にイデア界(叡智界)をおいた。このイデアという概念は、プラトン哲学の中心概念ともいえる。イデアとは完全にして普遍、永遠の真実性であり、物体としては捉えられない存在である。人間の感覚的世界の事物はこのイデアを原型とする模造であり、イデアを分有してのみ存在する。イデアは、人間の感覚的知覚の対象とはならず、理性的認識の対象である。新プラトン主義は、この思想をさらに発展させ、従来のプラトン哲学のイデア界以上の究極の原理を求めたのである。⁽²⁾

さらにフレーベルは、そのような「生の合一」を了解させる心的機能として「予感」(Ahnung)を提唱した。子どもは、成人と比べて、遙かに強く未来の生や諸事象との関わりをもった存在であるが故に、予感の働きもいっそう顕著であると考えたフレーベルは、晩年いっそう幼児の教育に傾倒するようになったのであるが、それは幼児の教育のみならず、彼を含め成人一般が失われた心的機能である予感を取り戻すための過程でもあった。

予感とは、フレーベルの教育思想における最も基本的かつ重要な概念の一つである。人間には、旅先で偶然に見た風景の中に自己の人生の未来全体を感じとったり、流行歌を通じて時代の大きな変化をおぼろげに感じとるというように、個別的事象を通じて全体的事象を把握したり、生命のより高い段階を先取りする判断作用が一般的に認められる。このような判断作用は、科学的・客観的判断作用とは異なり、日常では勘の働きとして説明されるが、とりわけ未来の事象や未来の生との関わりで生じる場合、一般的には予感の働きとして説明される。

フレーベルは、予感⁽³⁾は人間の幼児期において最大限に働くと考えていた。すなわち、子どもは神や人間の本質をまだ認識することはできないが、その本質を予

感することはできると確信していたのである。そして予感という心的機能が、子どもの宗教的情操の源泉であり、さらには予感を通して神を感じることは、認識や概念による神の理解をはるかに超えるものであり、したがって「生の合一」という観点からみると、子どもはより上位の宗教的資質を持った存在とされたのである。

(3) 子どもの宗教的情操の教育可能性

フレーベルは、そのような予感を呼び起こすための教育上の装置として「象徴」(Sinnbild) の持つ意味と働きをきわめて重視している。彼の考案した「恩物」(Gabe) は、子どもの予感を呼び起こすための象徴の集合群である。予感能力の保護と形成を教育の重要な課題であると認識したフレーベルは、恩物においても予感能力を形成するための様々な工夫を凝らしている。恩物は、具体的に与えられた子どもの遊戯の対象物であると同時に、より深い精神的意味が子どもによって把握され、それによって子どもが自己の心的機能を形成するのみならず、世界像の樹立に対する内容的な諸要素を獲得することを企図している。そして、とりわけ重要なのが、神への予感である。しかしながらフレーベルは、子どもの本来的な宗教的情操を前提にしつつも、子どもが概念的形式を通じてそれらを獲得することを決して望んでいないのである。

幼児期の子どもにあっては、総じてまだ、その自己理解と自己知覚において潜在的であり未活動状態に止まっている。そこでは、自己の内外の意識的な生に対してのおぼろげな予感があるのみである。ときに表れる宗教的情感のより深い意義も、差し当たりただ無意識にぼんやりと子どもによって受け取られ、ただまさに予感されるにすぎない。しかし、フレーベルはそれ故に幼児期を特別なものとして認識していた。子どもは世界を悟性的に把握する能力は持っていない、だが情感的な予感の形式において、豊富な生命理解と世界理解とを獲得できるというすばらしい能力を有していることを彼は発見した。そして人間意識の発達過程において、あらゆる事物は、まず無意識の形式をとって幼児期に準備されて、後ほど概念的に解明されるのであり、生の究極的意味規範も、必然的にこのようなおぼろげな予感を経由して、のちに明瞭な意識にもたらされるとした。

しかしながらフレーベルは、概念的解明や明瞭な意識の意義をけっして高く評

価しなかった。論文『1836年は生命の確信を要求する』において、彼はこのように述べている。

「最も内的な条件としては、なによりもまずとくに人間性のうちに宿る神性を感じることによって生き生きと貫かれた状態にあることである。すべてのものを貫いているその確信と誠実さとは、人間性のうちにみられるあらゆる感情、思考および行為の決定者であり活動基盤であり、またそれらに秩序をあたえるものでありそれらの評価の基準である⁽³⁾」。

つまり、神性を概念的に解明するのではなく、ただ感ずることの重要性を主張しており、予感を通した宗教的情操が、言語的に認識された宗教概念の上位にあることをほのめかしている。ここには、神は知るのではなく感じるものであるとするフレーベル哲学が反映している。つまりフレーベル教育の到達点である生の合一は、概念的にはよくわからぬが、個々のものに即して全体を把握するという子どもの心的機能である予感にその鍵がある。

さらにフレーベルは、精神的内容を具体的に知覚可能な形象に直観化したものが象徴であるとする。象徴は、精神的なものと感覚的なものが相互浸透していることに特徴がある。これが、言語を介した理性的認識に対する象徴の存在意義であり、教育可能性を示唆する所以でもある。そしてここでいう象徴とは、概念的にはまだよくわからぬが、個々のものに即して全体を把握するという予感に働きかける性質を有していなければならないとされる。予感とは、直接的に与えられた表面を突き破って進むことによって、感覚的直観をより深い精神的意味の拡大へと拡大するものである。したがって、もし予感を伴わないならば、宗教的对象への直観も無意味な行為となる。

子どもの宗教的情操は、予感と不可分に結びついている。感覚的に与えられた象徴をただ直観することによって、子どもは概念的な明確さをともなうのではなく、情感的にぼんやりと深い意味を感じとることができる。このように子どもは、その深い意味をただ予感するのみである。すなわち、象徴を前にして、子どもは意味を完全な概念的明確性へともたらすことができる以前に、先ずそのより深い意味を予感という心的機能の働きによって内面に取り込むことができる。その意味で、象徴と予感とは相互に対応し合うものであるといえる。したがって、より深い意味を背景にする象徴への誘導は、子どもの予感と宗教的情操を保護しより高

める道であり、そこに教育可能性が存在するのである。

このようにフレーベル教育では、予感およびそれと不可分に結びついている象徴の働きが重視される。というのは、究極的にはそれらが人間を神的統一へと導く宗教感情の源泉であると考えたからである。フレーベルは、内在する神性を意識化し認識するのではなく、ただ感じることをより重視した。たしかに予感的に把握された神的本質は、やがて意識、認識、明瞭な洞察へともたらされる。しかしここで獲得され意識化された認識は、常に新たな予感の力を得ることによって、意識の明るみから予感の暗闇へと回帰することで、その内的活力を維持することが出来るとされた。

(4) 女性の自己啓蒙の場としての幼稚園

このようにフレーベル教育は、予感を通した子どもの先験的な宗教的情操が重視されており、保育者には恩物に代表される象徴によってそれを育むことが期待されたのである。またフレーベルは、神の前に立つものとしては、子どもおよび女性を、成人男性の上位に置いている。子どもより大人、理性より感情、そして認識より予感に対してより高い価値を見出している。それは従来の価値の転倒というロマン主義的な思考形式である。しかしこれは、まだまだ女性や子どもの立場が低くみられていた時代においては画期的な思考であり、希望であったはずである。

フレーベルは、1826年の『人間教育』(Menschenerziehung)での乳幼児期から学童期の教育に出発して、1844年の『母の歌と愛撫の歌』(Mutter-und Kose-lieder)における母親と生後最初の乳幼児の教育に至るまで、フレーベルの教育的関心は、ますます年齢の小さな子どもに対して注がれ、子どもや母性賛美の傾向も強まっていく。そのため、元来は計画されていた『人間教育』の続編も存命中に書かれることはなかった。乳幼児期の教育こそが、まさに人間形成や教育制度の全体に対して最も強い影響を与えるとフレーベルは確信するようになるが、こうした傾向は、より根源へと向かうロマン主義的態度の表れであるといえる。だが、このようなロマン主義的理想は信仰や教育への情熱に溢れていた婦人宣教師たちの心情にたいへん合致するものであった。さらにフレーベルは、1809年のルードルシュタット侯妃に宛てた書簡で「最も優れた学校令といえども、

社会の改革なしには何ら実りをもたらさないことを、いくつかの国々の体験が教えています」と述べているように、社会の変革を強く望んでいた政治教育者としての側面を持っている⁽¹⁾。

女性宣教師たちも多くの関心を子どもに注いでいたと同時に、社会の変革を強く望む人たちであった、彼女たちは子どもを通して母親を、母親を通して家庭を、そして家庭を通して社会の変革へと広い展望を持っていた。幼稚園が特定の社会階層を超えて広く浸透し、やがては子どもを通して社会を改革したいという願いはフレーベルと酷似している。フレーベル自身も、彼の幼稚園での保育のあり方が、やがて一般家庭にとって普通のものとなり、また集団的な保育を保障するものとして共同の遊び場が設けられることによって、制度としての幼稚園は解消されるべきだと考えていたのである。

彼女たちが、幼稚園における教育を通じて、女性の自立や職業的アイデンティティの確立を目指した点も看過できない。当時女性の専門職への道は非常に限られていたのである。だが、19世紀後半から20世紀初頭にかけて、婦人参政権の要求を中心とした女性解放運動が世界的に高まる「第1波フェミニズム」と彼女らの活動した時期はほぼ重なっていることから、女性の地位向上が次第に現実化しつつあったのも事実であり、期待は大きかったと思われる。したがって幼稚園は子どものための教育機関であったが、一方で、女性の自己啓蒙の場としての側面もあったといえる。

このような理由から、フレーベルの教育思想は婦人宣教師たちによって受け入れられ、草創期のキリスト教主義保育においては、まさに理論的支柱として存在したのであった。

2. J・K・Uとフレーベル、および進歩主義教育の受容

(1) J・K・Uの設立

「日本幼稚園連盟」と邦訳されるJ・K・U (Japan Kindergarten Union) は、1906 (明治39) 年に設立、その後1940 (昭和15) 年に連盟が正式に解消するまで続いた。J・K・Uの設立は、ハウの提唱によるものである。彼女は、キリスト教幼稚園、保育所、保育者養成期間の統一機関をつくる必要があることを切

望していた。

ハウの呼びかけで、1906（明治39）年の8月28日から30日まで、軽井沢にて、保育に関係のある宣教師たちが集まり集会が行われた。そこで統一機関を設立することで意見が一致し、9月1日から3日まで第一回総会を開きJ・K・Uが誕生した。出席者は19名の婦人宣教師たちであり、日本人では唯一、保姆の和久山キソが参加した。和久山は、頌栄保姆伝習所の保姆で、ハウの片腕として活躍した人物である。なおその会議では、新組織をJ・K・U（日本幼稚園連盟）とすること、年次総会を催すこと、年報を刊行すること、I・K・U（International Kindergarten Union、万国幼稚園連盟）と連携することが可決された。そして初代会長にはハウが、和久山キソも理事に選出された⁽⁵⁾

1908（明治41）年の年報でハウは、J・K・Uが目すべき仕事として、①キリスト教主義の幼稚園や保姆養成所に関心を持つこと、②少なくとも互いに面識を持つこと、③日本の仲間やその人たちの仕事を知ること、④可能な限り日本の一般教育制度について十分な知識を得ること、⑤海外の幼稚園事情の研究、を挙げている。ここからも理解されるように、この連盟は各教派を超えた国際的なものであり、互いに協力して日本のキリスト教保育を推進していこうというものであった。またJ・K・Uは、1907（明治40）年にニューヨークで開催されたI・K・Uの理事会で正式に支部として認知され、国際的にも認められた団体として、日本国内だけでなく世界の保育界の動向を知る役割を果たすようになる。

ハウは、キリスト教保育を行うためには幼稚園そのものが徹底した正しい教育をするのでなければならないとし、そのためには質の高い保育者を養成することが重要であると考えていた。そして彼女は、質の高い保育者養成とは、保育技術の習得だけではなく高い教養教育に裏打ちされなければならないと確信していた。じっさいハウは、第1回J・K・U年次総会会長の挨拶において、「現在、私たちが一番切実に求めているのは、新しい織紙や縫い取りの本ではなく、積み木やゲームの本でもありません。求めているものは心理学、哲学、教育学、科学、文学、芸術といった分野の本なのです」と述べ、保育者は保育の実際面だけでなく、これを支えるより高い教養を絶えず学んでいく必要があることを力説している⁽⁶⁾。

(2) J・K・Uの啓蒙活動

J・K・Uは、原則として毎年一回、夏に軽井沢のユニオン・チャーチを会場に定例の集会を開き、英文の年報を発行したことからわかるように、保育者の教養教育にも大いに貢献した組織である。とくに年報は、毎年行われた年次総会の報告や幼稚園、保育所、養成学校の報告、研究論文などの非常に幅広い題材に加え、当時の日本社会では一般に普及していなかった多くのスナップ写真を掲載するなど、貴重な資料の提供を通して保育者の啓蒙に努めた。年報は、1907（明治40）年の第1年報（Annual Report of The Japan Kindergaruten Union）以降、1935（昭和10）年の第28年報まで発行され、最終号は1937～39年の報告として出された。記載された論文には次のようなものがあげられる。

「幼稚園文学・幼稚園統計学・恩物の基準」（1908）

「幼稚園のための物語、幼稚園での行事、私の体験した幼稚園の同窓会、公立学校における幼稚園卒園児の地位、日本伝道のために私たちの幼稚園は何をしているか。日本・中国・韓国・台湾での新しい動き」（1909）

「1910年の幼稚園の出来事と統計」（1910）

「幼稚園の保育計画、幼稚園での図画、日本におけるフレーベルの『母の遊び』の用い方」（1911）

「福音伝道の力としてみた幼稚園、遊びとゲームの教育的価値」（1912）

「日本における私たち幼稚園の使命、ゲームの問題」（1913）

「アメリカでのモンテッソーリ・メソッド、ローマの『子どもの家』訪問」（1914）

「幼稚園の活動と保育教材、幼稚園における実際的な問題、子どものための節制の教育」（1915）

このように初期の年報の論文や記事は、ハウによる啓蒙的なものが主体である。彼女は領栄保母伝習所の所長で当時のキリスト教主義保育の指導者的存在であった。ところが1910年代（大正前半）にはいると、変化の兆しがみられる。すなわち1912（大正元）年の論文は、福音伝道機関としての役割を幼稚園にみており、さらに「遊びとゲームの教育的役割」は、前年の『母の遊び』（母の歌と愛撫の歌）と対をなすものであるといえる。

これはキリスト教主義幼稚園が、フレーベルの理論に批判が加えられた時点で、

保育内容の再検討や保育理論の再点検を始めたことを意味している。1914年の論文で、ハウはモンテッソーリ・メソッドに対する印象を記しているが、自由を子どもに与える点にたいへん好印象を持ち、教師が子どもの背後に立って全く喋らないか、僅かしか喋らない点にも感心している。実際に子どもの家を視察したタムソン (Gasell R. Thomson) は、バプテスト派の宣教師で神戸の善隣幼稚園の園長であったが、モンテッソーリ・メソッドにいたく感動し、「子どもの家」(Casa dei Bambini) を訪れる訪問団や、モンテッソーリ・メソッドを学ぶ三ヶ月の教員養成コースのことを紹介している。

しかしJ・K・Uの指導者たちには、幼児の自由な遊びやごっこ遊びを保育に取り入れた広島女学院のマーガレット・クック (Margaret M. Cook, 1870～1958) のように新しい教育の動向に深い関心を抱く人たちが現れる一方で、フレーベル主義に固執する保守派の数も多かった。翌1915 (大正4) 年の論文は、幼稚園教育を伝道のためと位置づける立場を鮮明にし、フレーベルの恩物遊戯の役割を重視したものであった。たしかに明治期からの恩物教授は、教師主導による模倣にとどまっていたところに問題があったのは事実である。よって、フレーベル批判の中心となった子どもの「遊び」をどのように位置づけ、モンテッソーリによって提示された子どもの自由や自己活動への欲求を、どのように保育に生かしていくのが、その後のJ・K・U会員にとって新しい課題となったのである。

(3) ハウとフレーベル批判

日本キリスト教主義保育の実質的指導者であったハウは、1903 (明治36年) に帰米し、シカゴにある彼女の母校の「シカゴ・フレーベル協会保姆伝習学校」副校長として招聘された。その後1906 (明治39) 年、日本キリスト教会の懇願により、ハウは再び婦人宣教師として来日し、頌栄保姆伝習所の所長となった。だが帰任したハウには、頌栄保姆伝習所の教育が、旧態依然としたものに映ったかもしれない。というのは、帰国中に進歩派とフレーベル主義者と呼ばれた保守派の論争を目の当たりにしており、かつてのようにフレーベルの恩物教授がそのまま幼稚園教育であるという考えは、すでに彼女にはなかったと思われる。⁽⁸⁾

フレーベル主義の理解と方法論をめぐる、従来のそれを固守すべきとする保守派、進歩主義的教育の理解に基づいて再解釈しつつ保育に取り入れようとする

進歩主義派の人々の間ですでに1880年代の終わりから論争が始まっていた。1885年、米国の全国教育連盟に幼稚園部が設けられたが、その第一回の会合からフレーベル主義幼稚園の保育内容への疑問の声が大きく広がっていた。ブライアン(Anna Bryan)の幼稚園教育に関する批判は、その後のフレーベル批判の引き金になったことはよく知られている。

彼女の批判はとくに恩物とその使用に対して向けられた。①フレーベルが体系づけた教育遊具(恩物)の系列は子どもの自由を奪うものである、②彼の遊具が唯一の教育手段と考えることは誤りである、③遊具の象徴主義への疑問、④遊具が子どもを支配し、遊戯の生命が失われている、等。更にこれらの批判は多くの幼稚園関係者の賛同を得ることになり、進歩主義派を活気づかせた。

保守派と進歩主義派の対立は、1898年の国際幼稚園連盟(The International Kindergarten Union)の総会で決定的となった。ブロー(Suzan E. Blow, 1843~1916)は、進歩主義派の批判を従来の価値に対する危険な挑戦とし、伝統的なフレーベル主義を固守する立場を取った。これに対して進歩主義派は、子どもの帰納的、科学的研究に基づいて新しい教育理論、教育方針論を主張した。テンプル(Alice Temple, 1871~1946)は、子どもの有目的な活動へのデューイの要求を提案し、ヒル(Patty Smith Hill, 1868~1946)は、教育の方法の基礎は人間の発達の科学に求めなければならないし、教育の目的は、社会的に決定されていかなければならないと提案した。そして両者の間に、フレーベル主義と進歩主義の両者に立脚し、幼児理解の調停役的存在であったハリソン(Elizabeth Harrison, 1849~1927)がいた。

1903年、国際幼稚園連盟は両者の対立を調停するために15人委員会(後に19人委員会となる)の設置を決定し、その後数年にわたって討論が繰り返された。しかし対立は解消せず、1913年に保守派(ブロー)、進歩主義派(ヒル)、保守-進歩主義派(ハリソン)の報告書(The kindergarten: Report of the committee of nineteen on the theory and practice of the kindergarten)が出版されるが、保守派の報告は、国際幼稚園連盟においても幼稚園の教育思想を代表とする見解とはならなかった。さらにブローとヒルは、コロンビア大学のラーチャーズ・カレッジでも幼稚園教育に関する講義を行ったが、結局、ブローは、ヒルによって論破され、論争は、進歩主義派の代表であるヒルの勝利に終わる。

ヒルは、ホール（Granville Stanley Hall, 1844～1924）、ソーンダイク（Edward L. Thorndike, 1874～1949）の心理学、さらにデューイやキルパトリック（William Heard Kilpatrick, 1871～1965）らいわゆる進歩主義教育者たちから学び、それを武器に従来の幼稚園の教育理論や恩物を批判し、自分たちの立場を固め、新しい幼児教育論、方法論を確立することに成功したのであった。

こうした動向はハウに大きな影響を与えた。1903（明治36）年8月に、岡山県教育界主催の夏期講習に和久山と講師として招かれ講演しているが、その時すでにアメリカにおける恩物使用の変化について述べている。再来日後も自らの著作『保育学初歩』（1893）を絶版にして頌栄で用いなくなり、子どもへの使用方法にも変化が見られることから、恩物の使用に対しては進歩主義派の考えにかなり共感していることがわかる。

『保育学初歩』は、内容を要約すると、恩物の教育的意義を、身体的、知的、徳育的観点から述べたものである。だがその後、頌栄保姆伝習所の学生たちは恩物については学習したものの、この書について全く知らされることはなかった。進歩主義の教育理論を研究し、子どもの活動からも学ぶところがあって、恩物の論理的に体系づけられた系列を、むしろ時代に合わないと考えるようになったことがうかがえる。

しかし1908（明治41）年のJ・K・Uの会長挨拶のなかで「アメリカでは伝統的な方法から脱却しようとする風潮の中で多くの保育者が精神疲労に陥っている」と述べるように、彼女は伝統的なフレーベル理念から完全に離れたわけではなく、フレーベルの教育理念は支持するが、保育内容については時代に応じて柔軟な姿勢を取っていたと評価することもできる。ハウの保育実践は来日当初は恩物主体であったものの、その後はフレーベルの根本思想を代表する『母の歌と愛撫の歌』を精神的基盤としつつ、実践では進歩主義を取り入れた折衷型の保育へ変化していくのである。

3. 保育の理念と実践の乖離

(1) 恩物使用の変化－保育方法の多様化－

文部省は、幼稚園がどのような保育主義を取っているかを調べるため、1921

(大正10)年2月10日現在における保育方法の調査を行った。調査は5つの項目に分類して、回答を求めるものであったが、その結果は表1のように、フレーベル主義を加味するものが第一位、フレーベル、モンテッソーリ主義を加味するものが第二位を占めており、フレーベル主義が相変わらず幼稚園教育の主流を占めていたことがわかる。

モンテッソーリ・メソッドは、1912(明治45)年に倉橋惣三によって紹介されたが、大正期に入ると急速に、その感覚教育が幼稚園の指導法に取り入れられるようになった。

表1 大正10年2月10日現在における保育方法の全国調査

	他の主義を加味せざるもの	フレーベル式を加味するもの	モンテッソーリ式を加味するもの	フレーベル式およびモンテッソーリ式を加味するもの	その他の主義を加味するもの	計
師範学校附属	1	4	0	11	2	18
市町村立	5	63	4	119	40	231
私立	9	235	6	121	59	430
計	15	302	10	251	101	679
東京女高師附属					1	
奈良女高師附属				1		

出典：文部省『幼稚園教育百年史』145頁。

表2 フレーベル主義保育を採用する幼稚園の割合

種別・園数	全体	フレーベル主義園	割合
師範学校附属	18	4	22. 5%
市町村立	231	63	27. 3%
私立	430	235	54. 7%
合計	679	302	—

表3 大正期に設立されたキリスト教主義幼稚園

年 代	園数
元年 (1912) ※明治45	6
2年	12
3年	6
4年	7
5年	5
6年	9
7年	11
8年	7
9年	1
10年	7
11年	10
12年	4
13年	9
14年	8
15年 (1926) ※昭和元	16
	計 118

出典：日本保育学会編『日本幼児保育史』第三巻 248頁。

しかし官立の東京女子高等師範学校附属幼稚園はフレーベルでもモンテッソーリでもなく、進歩主義教育に基づいた保育であり、官立奈良女子高等師範学校附属幼稚園では、フレーベルとモンテッソーリを加味した保育であった。

また、表2に示すように、フレーベルの恩物を中心とする保育内容を採用する園数を全体に対する割合別でみると、公立ではおよそ四分の一がフレーベル主義のみの保育であるが、私立では全体中、約二分の一がフレーベル主義式の保育であったことがわかる。

モンテッソーリ・メソッドにおいて使用される教具は、当然ながらフレーベルの恩物と比較されることが多かった。モンテッソーリの教具が製品としての完成度があまりに高く幼児が飽きてしまうという批判もあったが、その一方で、フレー

ベル恩物へのアンチテーゼとしての役割を担うことにもなった。たとえば、フレーベルの恩物が幼児たちに一斉に押しつける傾向があるのに対して、モンテッソーリの教具は個々の自発的な活動を伸ばすものとして賞賛された。モンテッソーリ・メソッドを否定するものとしては、「その感覚教育を直ちに移してわが国の保育界に採用しても大して効能はない」とか「モンテッソーリの遊具は分散的、抽象的、組織的、一時的であるが、フレーベルの遊具は思想構成的、総合的、具体的、永続的である」とか「モンテッソーリには種々の良い点もあるが、その多くはフレーベルの方法を深く研究すれば、その中に含まれている」などということが言われた。⁽⁹⁾ いずれにせよ「幼児教育は恩物をもって実践するものである」という考え方は、大正時代にはいと薄れていき、恩物使用が、数ある保育実践の一つとして相対化されていく風潮は止めようがなかったのは事実である。

ここで大正期における保育内容と指導の特徴を総括すると、この頃に、小学校教育の分野で台頭した新教育運動（進歩主義教育）の影響を受けながら、自由保育・生活保育などの新しい教育方法を更に発展させる努力が行われる一方、これらが無批判に取り入れることに対する反対から、改めてフレーベルの恩物を見直そうとする機運も生まれるなど、新旧様々な考え方に基づく保育内容や指導法が考案・実施されたことである。なお、表3に示したように、大正期には1920（大正9）年を除くと、毎年5から10園のキリスト教主義幼稚園が創立されている。

(2) ハウの揺らぎ

さてハウは、1913（明治46）～14年と、1917（大正6）～18年の2度休暇帰国しているが、このときシカゴのハリソンが開いたモンテッソーリ式の実験夏期学校に参加して学び、モンテッソーリ教具を持ち帰っている。彼女は新しい保育方法にたいへん関心を持っていた。それは1914（大正3）年のJ・K・U年会において、「アメリカでのモンテッソーリ・メソッド」と題して講演を行っていることからわかる。ただ、それを実際の保育に取り入れることには極めて慎重であったともいわれる。モンテッソーリ教育についても、進歩主義教育についても自由と放任を取り違えないように、また、新しい方法を取り入れるときには、その理論をしっかり学ばなければならないと、厳しく戒めている⁽¹⁰⁾。

ハウは、モンテッソーリのいう個性の自由な発達という主張には深く傾倒していたが、「個性の伸長という教育はフレーベルの中に十分に説かれている」と言ったという⁽¹¹⁾。すなわち、フレーベルの『母の歌と愛撫の歌』と『人間教育』を幼児教育における理論的かつ精神的支柱としてフレーベルの哲学は継承しつつも、保育の現場における実際的な恩物の使用という面からは、より柔軟な姿勢で臨むことによって、新思潮とそれに基づいた教育法を取り込んでいくという、ある意味で非常に困難な道を選択したのであった。

彼女は、とりわけ『母の歌と愛撫の歌』を自らのフレーベル精神の最大の拠り所として考えていた。この書はかつて教育哲学者ボルノー（Otto Friedrich Bollnow, 1903～1991）が、「フレーベルに関する研究は、たえず繰り返してこの書に戻ってゆかなければならない。というのも、フレーベルの教育思想が、この書において最も簡潔かつ明瞭に描かれているからである」と賞賛したように、⁽¹²⁾

フレーベルの他の書物とは全く趣を異にする構成をもち、かつ彼の深遠な思想を象徴的に体現した教育書としてきわめて高く評価されてきた。それは、家庭という狭い圏内で、母親だけがほとんど唯一の教育者として描かれているものの、そこにはフレーベルが終生主張してきた自然と精神との統一というロマン主義的原理が思想的背景として脈々と流れているからである。⁽¹³⁾

だが、精神はフレーベルで、実践は進歩主義を取り入れるという姿勢が多くの矛盾をはらんでいることはいうまでもない。とりわけ当時のキリスト教主義保育の実質的指導者であったハウの揺らぎは、保育界に大きな影響を与えたと思われる。このことはやがて、同じキリスト教主義幼稚園でありながら、一方でますます恩物の比重を減らしていく進歩主義的立場の園と、それとは逆にいっそう伝統的なフレーベル主義を守ろうとする保守派の立場の幼稚園との間に、保育形態上の乖離を顕在化させたのである。

(3) 保守派と進歩主義派の保育内容－恩物使用をめぐる－

1969（昭和44）年編纂の『日本幼児保育史』第三巻では、大正期の幼稚園の保育内容をみるため、1921（大正10）年以前に創立されて、1968（昭和43）年まで存続している231の幼稚園への質問調査と結果が掲載されている。⁽¹⁴⁾

その質問内容は

1. 貴園の大正時代の保育内容はどんなものでしたか。
2. 貴園の大正時代の保育内容で特に熱心に行われたことがありましたらお書き下さい。

というものであり、この調査から51園の幼稚園から回答を得ている。その中からキリスト教系の幼稚園についてみると、恩物使用を中心とする保育内容の幼稚園の数が多勢を占めていたことがわかる。なかでもとくに伝統的なフレーベル主義を堅持し、20恩物を中心に進めているところが、渋谷同胞幼稚園（東京都）と柳城女子短期大学附属柳城幼稚園（名古屋市）である。両園は宗教教育も熱心に行っていた。

渋谷同胞幼稚園（東京都）

1. 婦人宣教師の指導監督の下に行われた。主として保育者養成所で習得した教育理念、技術によった。即ちフレーベルの「人間の教育」と「恩物」による教育

であった。

2. フレーベルの恩物による教育。音楽教育も主として英、米、独よりの翻訳保育唱歌、リズムの類であった。キリスト教による宗教教育（聖書童話）が行われた。

柳城女子短期大学附属柳城幼稚園（名古屋市）

1. 登園後礼拝（キリスト教）をもってはじめる。聖書賛美歌、旧新約聖書の話をした。一般の歌は英語のものを訳して用いた。手技はたたみ紙、縫取り、織紙を主としフレーベルの恩物を多く用いた。遊戯も外国のものを訳して用いた。

2. フレーベル主義でフレーベルの恩物をよくした。宗教教育に力を入れた。

一方、東洋英和幼稚園（東京都）やハリス記念鎌倉幼稚園（鎌倉市）ではリズムや感覚訓練に力が注がれ、伝統的なフレーベル主義幼稚園で行われてきた保育内容である恩物や手技からの脱却がみられる。なお、東洋英和幼稚園は東洋英和女学校幼稚園師範科の附属幼稚園である。同師範科はキリスト教主義幼稚園への保育者供給に大きく貢献した。当時、高等女学校に附設された幼稚園や市町村が設置した幼稚園では、高等女学校を修了したものを比較的採用しやすかったが、小さなキリスト教系幼稚園では適当な人材を確保するのが難しい状況であった。したがって、キリスト教系幼稚園の多数を占める小規模園にとって、東洋英和女学校は貴重な保姆養成所の一つであった。

東洋英和幼稚園（東京都）

- | | |
|----------------|--------------|
| 1. 九時三十分～十時十分前 | 礼拝を中心とした朝の輪 |
| 十時十分前～二十分くらい | 組で話し合い、歌をうたう |
| 十時十分～三十分 | 自由遊び、リズム活動 |
| 十時四十分～十一時 | 牛乳 |
| 十一時～十一時四十五分 | 自由制作 |

以上は大正後期のものと想定します。これらのことは、保育科の同窓生が作っていた雑誌からわかりました。

2. 家庭訪問、母の会（母のための講座）、ティームを組んで、若い教師が熱心に行っていたようです。特徴とみられるものは、朝の礼拝を中心とした二十分くらいのモーニングサークルでした。内容は小さい礼拝と、遊びの話しあい、（サークルになる前の自由遊びがあるので）リズム活動、スキップ、ギャロップ、歩く

など、基本的なことをしたようです。それから、リズムに特にたくさんの時間をとって、ピアノを聞いて表現をすることをしました。

ハリス記念鎌倉幼稚園（鎌倉市）

1. 園児が少なかったため、個人が尊重された。遊具、教材も十分に整えられていたため自由な面を伸ばす内容が多かったと思う。宣教師がいた関係でアメリカの音楽リズムが多く取り入れられていたようだ。
2. リズム指導が一番多かった。当時使用されていたリズムの楽譜が数冊あり、現代の教材にその中から取り上げられているものも多いので、進んだ教育だったと思う。

その他、賤機幼稚園（静岡市）、川上幼稚園（金沢市）などが、フレーベル主義を取り入れながらも、東洋英和幼稚園と大綱においては同じ保育内容を実践した。両園はカナダ夫人伝道会社の経営によるものであるが、勤務する保姆は東洋英和女学校出身者が多かったからである。東洋英和に代表されるこれらの園の特徴は、幼児の興味と心身上の能力に応じての児童中心主義の保育を打ち出している点にある。全体的にみれば、恩物を使い保姆が中心となって一斉保育をする幼稚園が多かったとはいえ、しだいに恩物の使用を減らし、たとえ恩物を使用するにしても幼児の個性を尊重し、自由な想像力を伸ばす方法を採用する幼稚園が増えてきた。そして、この自由保育の中心に立ったのがランバス女学院である。

（4）自由保育のはじまりーランバス女学院の保姆養成ー

1919（大正8）年11月に神戸パルモア学院で開かれた南メソジスト・ミッション会議において、新しい二つの計画が生まれた。一つは、大阪にキリスト教婦人教育者の学校を設けることであり、他は、広島女学校に専門部を置くことであった。その結果、広島女学校保姆師範科と神戸のランバス記念伝道女学校との合同が決議され、ここに新学部と保育専修部とを持つランバス女学院（現・聖和大学）が大阪の地に誕生することになったのである。⁽¹⁵⁾ このミッション会議で6名の設立準備委員が指名された。広島女学校のクックもその委員の一人であった。

1922（大正11）年11月10日、学院の創立記念式が挙行され、クックはランバス女学院保姆専修部長となる。クックは広島女学校時代から幼児教育の精神的支柱をフレーベルに求めていたのだが、休暇帰国するたびに米国進歩主義教育の影響

を受けて、新しい学びの成果をキリスト教主義保育にもたらしたいと考えるようになっていった。フレーベル主義の幼児教育を学び、これをあくまで保持しようとする宣教師も少なくない状況にあって、彼女は、キリスト教に基盤を置いた子ども中心の保育を重視した。⁽¹⁶⁾

1921（大正10）年の「ランバス女学院保育専修部一覧」には、学校の目的が次のように述べられている。⁽¹⁷⁾

1. 目的

「本部は飽迄児童中心主義にして家庭、幼稚園若しくは学校に於いて真に児童を理解して保育教養せんと欲する者を収容し二カ年の正科を卒りし者には卒業証書を与えて其専門的幼稚園保姆たるを得せしむると同時に母若しくは教師として女子に必須なる寛實際的教育を施すを以て目的とす」－以下略－（下線角野）。

このようにランバス女学院の保育者養成は、はっきりと児童中心主義に立つ新しい教育であった。一つの学校が新思潮を看板にしたことは、当時の保育界において画期的なことであった。以後、多くの保姆養成学校がランバス女学院に人材を送り、その結果、多くの新しい保育が摂取されていくことになる。ランバス女学院は、日本のキリスト教主義保育に新時代を開く役割を果たすこととなったのである。

クックはすでに広島女学校時代に米国の進歩主義教育の思想を紹介していたのであるが、⁽¹⁸⁾ランバス女学院にてこれをいっそう着実に継承したのは、長崎の活水女学校に奉職した後、渡米してコロンビア大学でM・Aの学位を受け、⁽¹⁹⁾クックによって招聘された高森フジ（1877～1969）であった。

高森は、コロンビア大学を中心とする進歩主義教育運動に直接触れて、それを学び取ってきた希少な日本人幼児教育者であった。したがってその影響力は大きく、現在の聖和大学における保育の中にもその伝統は受け継がれている。

だが、自由保育を推進しながらも、一貫して高森の保育理念と精神的支柱はフレーベルにあったようである。それは、雑誌『保育』（昭和41年7月号）の中で次のように述べていることからもわかる。⁽²⁰⁾

「わたしの考えはフレーベルが中心じゃ。人間の教育というのは宗教でだけ

りやならぬ。宗教という少し強く聞こえるかもしれないが、信念というように言ってもよい。

信念なしにはやれない。キリスト教、仏教ということではなしに信念をもった教育家でなければなりません」。

クックも、1937（昭和12）年の「フレーベル幼稚園100年祭」にあたって、キリスト教保育連盟関西西部会において「フレーベル、その幼稚園の教育への貢献」と題する記念講演を行っているように、彼女らの幼児教育への直向きな情熱と努力の根底にあったものは、キリスト教信仰に加えて、フレーベル精神への強い共感と敬愛である。

たしかに、フレーベル思想の難解さもあって、ややもすれば形式主義に陥っていた恩物遊戯から、子ども中心の進歩主義への関心、そして自由保育の実践へと保育の形態は大きく変化した。しかし保育の根底にある子ども観や理念、そして精神という部分でフレーベル主義は継承され、絶えることはなかったのである。だが、フレーベル主義は精神的に継承し、実践は柔軟に進歩主義を取り入れるという発想は、折衷主義の印象をぬぐえないのも事実である。現場での恩物使用の形式主義への墮落を、深遠なフレーベル思想の理解不足からくるもの、すなわち保育者の資質や養成教育の不備に求めることもあながち間違っているとは思えないのである。フレーベル教育学の結晶ともいえる恩物が批判されるならば、はたして、フレーベルを精神的に継承するということが可能なのだろうか。また可能だとしても、フレーベル主義と進歩主義教育の理念上の乖離ゆえに、おそらくは発生するであろう、保育実践にあたっての心情的葛藤をいかに処理するのかという疑問も残る。

しかしながら、これまで述べてきた婦人宣教師や保育者は、フレーベルと進歩主義の共存というきわめて困難な課題をそれほど苦にすることなく乗り越えてきたような印象を受ける。その理由を明らかにすることが今後の課題といえよう。

おわりに

西欧社会において、幼児への保育の重要性が認識され、市民権を主張するようになったのは産業革命以降のことであり、とりわけフレーベルの力に負うところ

が大きい。フレーベルにとって、キリスト教信仰は人間性の回復であり、精神的飛躍をもたらすものであった。また同時に、権力と結合した教育への批判と、その現実の問題を克服するための力ともなり、教育への新しいモデルを提示する原動力となった。フレーベルのキリスト教理解の内容は正統なものとは異なっているが、その思想、教育理念がキリスト教的色彩の深いものであることは間違いない。

フレーベルは、万物を神から出ているものと理解し、神を万物の唯一の本源とし、万物の中に存在し万物を生かし、かつ万物を支配する存在と考えた。万物のなかに永久不滅の法則を認識する彼の神理解は、きわめて汎神論的であり万有在神論（Panentheismus）的である。そしてこのような考え方は、いうまでもなくドイツロマン主義の影響を受けている。万物のなかに内在する神性の認識とその自然的発展、無限なものとの生の合一において直観される根源的統一の感情あるいは人間の精神と神との根源的一致、宗教あるいは信仰への心情的理解、家庭や共同体における統一性と敬虔さの強調、模範としてのイエス、有限なものにおける象徴を通しての無限なものへの直観などは、フレーベルの宗教理解の特色であり、それは新プラトン主義からロマン主義への伝統を示すものである。

しかし、フレーベルの宗教理解には大きく欠落した部分がある。それは人間の罪についての認識、すなわち原罪論の欠落であり、そこから生ずる終末論の不在である。原罪の欠落は、人間の実存のもつ問題への深い認識あるいは人間存在につきまとう矛盾における楽観的姿勢、そして終末論の不在は、キリスト教的な歴史意識の欠如と未来への楽天的理解を意味する。つまりフレーベルの宗教観、世界観、教育観、子ども観は、さまざまな現実の問題を捨象したところに成り立つという、きわめて理想主義的な性格を有しているのである。しかし、フレーベルの幼稚園が幼児の教育の場として受け入れられ、成果をもちえたのは、この理想主義によるのであって、またそこに、幼稚園以上の教育段階で、彼の教育思想がほとんど展開されなかったという理由がある。

フレーベルの生きた時代には、近代化による自然と人間の分裂、工業化の急速な進展、都市化、そして個人主義に伴う共同体意識のゆらぎ等、人間が人間らしく生きることを妨げる様々な問題が、それほど深刻でなかったことにも注目せねばならない。

これに対して当時のわが国は、富国強兵をスローガンとして、日清、日露戦争を戦い、西欧列強に並び称されるまでになった激動の時代であった。それは急速な近代化に伴う諸問題を生じた時代であったことから、教育においても新しい方法や内容が望まれるという社会的背景があったといえる。そして、理想主義に成り立つフレーベル主義の教育は、その精神を別として、次第に古いものとして映るようになっていったのである。

しかし、これまで慈善の対象としての幼児の保育に加えて、幼児をその存在において認め、ふさわしい配慮を行わせる教育への道を拓いたものとして、フレーベルの価値がすべて色あせることはなかった。キリスト教主義の保育の精神的土壌をなすものとして、変わらず受けとめられ、進歩主義を代表とする幼児の新しい教育の可能性さえも、その多くはフレーベル主義というフィルターを通して提供されたのであった。

注

- (1) 1840年に「一般ドイツ幼稚園」(Der allgemeine deutsche Kindergarten)を創設し、指導者の養成を開始したことを皮切りに、プロイセン全土に幼稚園は拡大していった。しかしプロイセン政府は、フレーベルの信仰理解を危険な思想であると警戒し、結果、幼稚園は子どもを無神論に導き、社会主義を吹き込むなどという理由で禁止令を出した。
- (2) 古代の叡知として秘かに継承されてきたものをフレーベルがいかにして学んだかは定かでない。だが彼の教育思想と実践には、神と人間の心の間に横たわる深い裂け目を取り除こうとする神秘主義的な意図が明白である。
- (3) フレーベル著、小原國芳・荏苒雅子監修(1977)『フレーベル全集』第三巻 玉川大学出版部 552-553頁。
- (4) Grolle, Jは、1985年6月3日のハンブルク・フレーベルハウス125周年記念の講演で、1. カイルハウ学園が身分制教育を超えた普通教育を行い、ブルヘンシャフト運動と深く結びついていたこと、2. フランス七月革命の影響下で、すべてのドイツ人に祖国統一のための教育を求めたこと、3. 1831-36年のスイス滞在後、協会と国家の統制から自由な普通幼児教育を求めたこと、4. ドイツ3月革命とフレーベルが強く結びついていたこと、等によりフレーベルを政治教育者としてとらえた。

- (5) 彼女は、1918（大正7）年、シカゴでのI・K・Uの大会でも日本代表として出席している。
- (6) キリスト教保育連盟百年史編纂委員会編著（1986）『日本キリスト教保育百年史』キリスト教保育連盟 122頁。
- (7) 副校長を務める傍ら「教育史」、「幼稚園児および年長児の遊び」などの特別講義を担当している。当時のシカゴはニューヨークのコロンビア大学と並んで新しい保育運動の中心地であった。なお、それ以前にもハウは、1895（明治28）年11月から1897（明治30）年6月までシカゴの実家で過ごしている。
- (8) 帰任した彼女と頌栄保母伝習所との関係は以前と同様ではなかった。高野勝夫著『エ・エル・ハウ女史と頌栄の歩み』によると、ハウが帰任して伝習所の教室にはいってみると、三年前にかけておいた学科課程表がそのままになっていた。「どうして、そんな古いものをまだかけているんですか。いまもそのとおりやっているんですか」と、彼女がたいへん驚いていたエピソードが記されている。
- (9) 文部省編（1979）『幼稚園教育百年史』ひかりのくに 144頁。
- (10) 西垣光代著（2007）『A.L. ハウの生涯』神戸新聞総合出版センター 28-29頁、128頁。ハウは、保育者は大学教授が学問を深めるように研究するように研究に励むべきであるし、何よりも原理をしっかりと学ぶことを主張した。彼女は、現場ですぐに役立つ即戦力のみを身につけた保育者は善しとしなかった。そして新しい保育法が出てきた場合は、まずその原理を学び、それが取り入れるに値するかどうか判断するための教養と知性の重要性を説いた。
- (11) キリスト教保育連盟百年史編纂委員会編著（1986）前掲書 185頁。
- (12) ボルノー著、岡本英明訳（1973）『フレーベルの教育学』187頁。
- (13) 『母の歌と愛撫の歌』の巻末のあとがき「この本を生み出した精神」を書いたヨハネス・プリューフアーは、その中で、フレーベルの言葉「私はこの書の中に、私の教育法の最も重要なものを示した」を引用し、「したがって、フレーベルの思想の内奥を究めんとしようとする人は、彼の『母の歌と愛撫の歌』を深く究めなければならない」と述べている。
- (14) 日本保育学会編（1969）『日本幼児保育史』第三巻 フレーベル館 65-70頁。
- (15) 聖和保育史刊行委員会編纂（1985）『聖和保育史』聖和大学 88頁。
- (16) クックは、広島女学校、ランパスを通じて34年間保育に貢献した。「その方、折って、考えて、責任もって」と指導した彼女の言葉はいまも語り継がれている。
- (17) 聖和保育史刊行委員会編纂（1985）前掲書 96頁。ランパス記念伝道女学校は、1888（明治21）年、J.W.ランパス婦人によって、婦人伝道師養成を目的として設立された学校である。また、

この学校に付属してランバス記念幼稚園があった。1923（大正12）年に、合同によりランバス女学院神学部となる。その後は、聖和大学キリスト教教育学科として引き継がれた。

- (18) クックの前任校である広島女学校附属幼稚園では、きわめて進歩主義的な幼児教育が行われていた。1914（大正3）年の「保育綱目」をみると、幼児の興味と心身上的の能力に応じての児童中心主義を打ち出していることがわかる。また、幼児の興味を単なる子どもの気分に委ねるのではなく、それを家庭・社会・自然界の分野に区分し、たとえば春期は、家庭を中心とした興味を引き出すというように、単元学習を志向したところにも特色がある。
- (19) 高森は、まずシカゴのナショナル・カレッジに入学、二年課程を一年で修了し、翌1915（大正4）年、コロンビア大学に入学し、B・Sを得た。その後、さらに二年の大学院課程を終えて、同大よりM・Aの学位を授与されて帰国している。
- (20) 聖和保育史刊行委員会編纂（1985）前掲書 407頁。
- (21) 聖和保育史刊行委員会編纂（1985）前掲書 402頁。

参考文献

- 角野雅彦著（2006）『19世紀後期におけるキリスト教主義保育の受容と展開—宣教師たちの活動を中心として—』 四国学院論集123号、四国学院文化学会。
- 角野雅彦著（2007）『フレーベル教育学における「予感」と象徴遊戯論に関する一考察』 四国学院論集124号、四国学院文化学会。
- キリスト教保育連盟百年史編纂委員会編著（1986）『日本キリスト教保育百年史』 キリスト教保育連盟
- 倉橋惣三・新庄よし子共著（1983）復刻版第二刷『日本幼稚園史』 臨川書店。
- 小林恵子著（2003）『日本の幼児教育につくした宣教師』 キリスト新聞社。
- シュブランガー著、小笠原道雄・鳥光菜穂子訳（1983）『フレーベルの思想界より』 玉川大学出版部。
- 聖和保育史刊行委員会（1985）『聖和保育史』 聖和大学。
- 聖和幼稚園100年史委員会（1991）『聖和幼稚園100年史』 聖和大学。
- 長尾十三二監修（1988）『アメリカの幼稚園運動』 明治図書。
- 西垣光代著（2007）『A. L ハウの生涯』 神戸新聞総合出版センター
- 日本ベスタロッチャー・フレーベル学会編（2006）『ベスタロッチャー・フレーベル事典』 玉川大学

出版部。

日本保育学会編（1969）『日本幼児保育史』第三巻 フレーベル館。

ハイラント著、小笠原道雄他訳『フレーベル入門』 玉川大学出版部。

フレーベル著、小原國芳・荘司雅子監修『フレーベル全集』 第一巻（1977）第二巻（1976）、
第三巻（1977）、第四巻（1981）、第五巻（1981） 玉川大学出版部。

ボルノー著、岡本英明訳（1973）『フレーベルの教育学』 理想社。

文部省編（1979）『幼稚園教育百年史』 ひかりのくに。